

まちづくり ひろしま

第32号 (平成29年11月15日)

読者数：594名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

「ヒロシマの再生」を考える

元広島市長

平岡 敬



2016年5月、米国のオバマ大統領の広島訪問を、広島市民は熱狂して迎えた。原爆ドームを背に、人類、歴史、戦争、科学技術に関して美しい言葉を連ねて演説する大統領のそばには、核兵器発射命令を出す通信装置を内蔵した黒い鞆があった。

この奇妙な光景を市民は黙って見ていた。

しかも、彼の来広を前に、日本政府をはじめ広島県知事、広島市長までもが「謝罪を求めない」と表明した。これは原爆で殺された死者の無念の思いを踏みにじるもので、いま安楽な生活を享受している者が口にすべき言葉ではあるまい。

米国の理不尽な、人道に背く原爆攻撃に対する怒りはどこへ行ったのか。広島はオバマ・安倍の繰り広げる政治ショーの貸し舞台となった。

私は「ヒロシマは死んだ」と思った。しかし、死者のことを思えば、ヒロシマをもう一度蘇えらせるために、生者は平和への意志をさらに固めなければならない。そのために三つの問題を考えてみたい。

第一は原爆攻撃をした米国の責任追及の問題である。

戦後、広島市民は「原爆攻撃は戦争犯罪である」という事実を大きな声で語る事が出来なかった。米国は広島・長崎の惨劇の責任論、あるいは報復論が起きることを恐れ、原爆被害の報道を禁じた。一方、日本人はアジア・太平洋戦争が中国侵略から始まったという認識が薄く、米国との戦争に敗れたとの思いが強かったため、自分たちの戦争責任を深く考えず、すべてを極東国際軍事裁判に任せることによって、自らを免罪した。それが米国の原爆投下責任を追及しなかったことにつながっている。

広島平和記念公園の原爆慰霊碑(1952年設置)に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という碑文には主語がない。当時「過ちを犯したのは誰か」という論争が起きた。結局、広島悲劇は核兵器を開発し使った人類の罪だ、という解釈に落ち着き、現在に至っている。私もかつてはその考えを肯定していた。しかし、米国が核兵器を手放さないばかりか、世界各地でやってきた数々の戦争を顧みる時、私は間違っていたと思うようになった。

主語の欠落は、原爆を使用した米国の責任を人類の過ちに拡散させる、あるいは人類の過ちにすり替える結果になった。碑文選定の時期は占領中であり、米国を刺激することを避けたのかもしれない。以来、広島は米国の責任や憎しみ、恨みに触れないようにして平和を語ってきた。憎しみを語るのは心が狭いとか、平和を願う心に反するといった言説が幅を利かせ、寛容を掲げることによって、米国との対決から逃げてきた。「仇を討ってくれ」と言って死んでいった人々の思いは封殺された。これは生き残った者の、あるいは一夜にして平和主義者になった者の死者への裏切りではなかったか。米国の責任をヒロシマが問わなくて、誰が問うのか。

私は報復を支持しているのではない。憎しみの感情の解消は報復によって得られるものではなく、加害者の反省と謝罪によってもたらされるものである。広島が責任を問い続けるのは、米国に二度と核兵器を使わせないためであり、その論理が核兵器禁止条約の基盤である。米国が過ちを認めることで、碑文は輝きを取り戻す。

なお広島が恨みや憎しみといった感情を抑圧してきたことが、沖縄や東京空襲などの戦争犠牲者、さらには世界の戦争被害者との感情の共有が出来ない一因ではないか、と思われてならない。また「核の傘」の下で核兵器廃絶を訴える偽善、日米安保条約による対米従属と軍事化が近隣諸国に与えている影響を無視して平和を訴える虚偽を恥じなければならない。

第二は、和解は如何にして可能かという問題である。

私たちは米国ともアジアの国々とも、いつかは（なるべく早く）国民レベルでの和解を果たさなければならない。

和解のためには、①加害者が過ちを認めて謝罪すること。②加害者が被害に対して補償すること。③二度と起こらないように措置をとること、が必要である。つまり、米国が原爆攻撃は間違いであったと認め、謝罪することが和解の第一歩である。

一方、日本もまた戦争中、多くの国際法違反を犯している。自分たちの過ちを認めつつ、米国の責任を問うのは大変難しいことだが、和解のためには避けて通れない。

第三は、核兵器廃絶の先に、ヒロシマが描く未来像は何か、という問題である。

核兵器が無くなっても、飢餓、貧困、病気、差別、人権侵害など、平和を脅かす要因がある限り、本当の平和な世界は来ない。ヒロシマは核兵器廃絶を訴えるとともに、格差社会の底辺で苦しむ人たち、飢えと病気に襲われている世界の難民たちに希望を与える未来像を示さなければならない。核廃絶の先に、豊かで公正で、差別のない社会を構想し、原発と科学技術のあり方を含めて、この矛盾に満ちた現代の状況を変える運動を伴わない限り、ヒロシマのいう平和はスローガンの連呼で終わるであろう。

(注) 平岡氏に、読者に今一番訴えたいことをということで巻頭言を依頼し、原稿をいただいた。他にも意見があると思われるが、まちづくりを進める上の精神的なバックボーンとして、広島を思想をかかげることは大事なことと思える。(編集委員 記)

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島駅南北自由通路全面開通

10月29日、JR広島駅南北自由通路の全面利用が開始され、広島駅自由通路・橋上駅舎・新幹線口ペDESTリアンデッキ・新幹線口広場の完成記念式典が開催された。

自由通路は5月末の橋上駅舎の開業に合わせて部分利用が始まり、駅の営業時間に限って通行可能であったが、この日から商業施設「ekie」（エキエ）の一部がオープンし、24時間自由に通行が可能となった。

駅北口にはペDESTリアンデッキ（歩行者専用橋）が昨年10月に完成し、北口広場の再整備も今年10月末に完了。

昨年以降、南口のB、Cブロックの再開発ビルが相次いで開業。北口も若草地区の再開発事業は数年前に完了し、現在、二葉の里地区に広島テレビ放送の新社屋やホテル、商業施設、駐車場などが入る複合ビルが来年3月完成を目指して建設中である。

駅周辺の商業施設、マンション、オフィス等の集積は目覚ましく、働く人や人口が急増し、地域の活性化に南口と北口を結ぶ意義は深い。

平成30年代半ばには広島電鉄の路面電車が高架で南口に乗り入れ、駅ビル「広島アッセ」も建て替える予定である。

広島の陸の玄関口はますます変貌し、ポテンシャルを高めていく。



完成式テープカット



駅構内平面図
(中国新聞 10/30 付)



南北自由通路

② 地域に根差した大イノコ祭りへ

第15回ひろしま街づくりデザイン賞（2015年度）を受賞した大イノコ祭りが今年も11月4・5日に袋町公園で開催。2013年に復活して5回目である。

昔からの「亥の子祭り」を発展させて、88本の竹の力で1.5トンの大石をついて福を願う広島の新しい祭りである。その竹を今年から江田島の竹林を伐採するところから取り組んでいる。

また広島国際大学の学生が企画段階から参画して、袋町の老舗の和菓子屋とコラボして和菓子を創作し、その販売とお好み焼きを出店。

初日のメインイベントは地元の子供たちの手で大石を浮かせること。東西南北に分かれて、4方から順に竹の先端につながれたロープを大石にひっかけて引っ張っていく。今回は17番目（竹68本）で浮き上がった。その瞬間の子供たちの喜びようは感動もの。

その後、大石を「亥の子石」に見立てた「大イノコ」（石動いすぎ）を行う。夜は幻想的にライトアップされた竹のサークル内で石動への奉納の儀式が厳かに執り行われ、伝統と現代アートの見事な融合だ。

公園の一角では竹遊びひろばが開かれ、家族連れの子供たちが昔ながらの竹のおもちゃ作りに楽しんでいる。また、折り鶴のお焚きあげ「はばたき」は世界中からの願いを天に羽ばたかせる営みという。

この祭も段々と輪を広げ、地域の祭として着実に根を張りつつある。



子供達による綱引き



大石が浮いた状況



折り鶴のお焚きあげ

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第7回）～任都栗 司市会議長（前編）～

～怪物か、あるいはほら吹き市議か？～

任都栗司（にとぐりつかさ）元市会議長（当時の表現で現在の市議会議員）ほど評価が分かれる人物はいないであろう。評価どころか、その活動・業績の実態さえも判断が別れ、片や常人をはるかに越える怪人物のなせるわざと認定するものから、全くその行動の根幹から疑い、単なるほら吹きと決めつけるものまで、ピンからキリまであり、ここで一つの人物編を提示すれば、いずれにせよ批判の対象になること請け合いである（以下敬称略とする）。

広島の復興の軌跡・人物編において歴代市長シリーズがほぼ終了したとき、ここで打ち切ることもできるであろう。それをあえて、続けようとし、しかも、いきなり最も書きにくいと思われる任都栗を取り上げることは無謀なことである。それでも、ここで書き残して置かなければ、永遠に陽の目を見ることなく埋もれてしまうかもしれない一コマがあるとの思いから、私が知り得た一コマを書き繋いでいこうとするものである。



任都栗の自伝とそれへの反証

ちょっと大げさに始めてしまったが、任都栗は終戦前から県議や市議を歴任しており、時に戦後は市会議長を4期務めており、大物市議であったことは確かである¹。任都栗市議の本人自身の手記「ABCC設立の経緯とその周辺事情」（1976年11月8日付）と題して経緯を説明しているので引用を進めてみると、任都栗は「サムス准将²が広島に来た時から話してみよう」と切り出し、「サムス准将は占領軍の厚生関係のセクションの長であった」と述べ、引き続いて「昭和23年初め頃から彼の代理人が広島に度々来て ABCC（現在の放射線影響研究所の前身）設立のための土地の確保につき、当時の浜井市長に調査を依頼したが、市長は革新系の人でこの問題に対しては非協力的であった」「市会議長であった私に会いに来た。昭和23（1948）年の12月28

¹ 続編で記述する予定であるが、草薙書房編集部編「市政の100人」（草薙書房、1973）として全国の市議100人を取りあげているが、その筆頭に任都栗司氏が掲載されている。

² GHQで衛生分野を取り仕切っていた公衆衛生福祉局長

日、ご用納めの午後であった」と続けている。そこでいくつかのやり取りがあったようで、最後に東京のサムのセクションへ来るように要請されたという。その日時は1949年1月4日(まさに戦後直後のお正月!)の午前10時であったという。そして任都栗はGHQ本部でサムス准将に面会したのみならず、その約一ヶ月後にマッカーサーにも面会したとする³。GHQでの最初の会見は、録音されてGHQ上層部に伝えられたと任都栗は証言し、そこで強く広島の復興に対して国の特別の支援を説いたことが功を奏し、結果的に「広島平和記念都市建設法」(以下「平和都市法」と略称する)の成立への道を開いたと主張する。

もし、これが事実であれば、ABCCの設立問題から始まったGHQとの折衝が、広島の戦後復興過程において決定的な役割を果たす平和都市法の制定という過程に至り、そこで任都栗が大きな役割を果たしたと証言していることになる。

ところが、ここでサムス准将が広島に来たこと、そして会見したこと、上京して会見したこと、さらにはマッカーサーに会見したこと、これら全てがあるいは特定のことが疑われ、否定されていることを紹介しておこう。これらすべてを詳細に吟味して記述することはできないが、例えば広島市公文書館紀要第29号(2016年発行)では「サムス局長の12月下旬来広説」を取り上げられ、PHW(Public Health and Welfare Section 公衆衛生福祉局)の旅行命令がないことから、「12月下旬にサムス局長はどこにも出張していないことがわかる」と主張している。さらにはサムス准将が1949年1月に広島訪問を果たしているが特別に広島だけの訪問ではなく、単なる表敬訪問で、ABCC移転問題は折衝されなかったというのである。ここでPHWの旅行命令まで確かめることはできないが、1948年12月あるいは翌年1月におけるサムス准将と任都栗の会見を否定することから、平和都市法制定全体への任都栗の貢献を否定し、あるいは過小評価しようという論拠となっている。こうして任都栗は広島の戦後復興過程で、正史から排除されようとしているのではないかという疑問が生じるのである。

任都栗の実像は？

確かに任都栗は猪突猛進型であり、自己顕示欲が強く、広島の政界では派閥を構成せず、どちらかといえば浮いた存在であった。広島市議会では有名な数人の有力議員がいて、対立抗争を繰り返していたが、どこにも付かないで様々な面で苦労したとされる。さらに、任都栗は1977年、広島市土地開発公社汚職事件に関与したとして収賄罪に問われ、その晩年は社会的活動の基盤も失った。その真偽はここでは問わないが、いずれにしても話題多い存在であった。



平和都市法が参議院で可決された1949年5月11日、国会議事堂前、中央右から楠瀬知事、任都栗市議、寺光参議院議事部長ら

ここでは平和都市法制定への任都栗の関与、貢献についてのみ追求してみよう。浜井信三著「広島市政秘話」あるいは「原爆市長」の中で「満場一致で両院通過」として、「任都栗氏は後に『この法律は僕がいなかったらできなかつただろう』と自慢していたが、あるいはそうであったかもしれない」といい、寺光忠も「きまじめな理論家浜井氏だけでは、中央政界がどうへソを曲げたかわからないところを、うまく救い、おぜん立てをしていったのは任都栗議長の実力だった」と回想している。その他、市長室にいた藤本千万太の手記⁴もある。

それにも関わらず、市史全体では、浜井市長の元で平和都市法が制定され、功績とされ、型破りの任都栗の行動、貢献は認められないというのであろうか。ここに問題提起するのである。

³ 広島市編「広島新史行政編」や広島市公文書館編・発行「広島平和記念都市建設法の制定の当時を振り返って一関係者による座談会」(1987) p. 17ではマッカーサーとの会見を歴史的事実として記述している。

⁴ 広島市史編修委員会専門部会編「広島新史編修手帖 NO. 3」pp. 25-30において藤本千万太は「平和都市法を動かしたもの」として1948年12月のサムス准将と任都栗司の会見を生々しく記述している。

任都栗の様々な足跡は、もっと後編で述べたいので、今回のまとまりの無さをお詫びする。

(経歴)

広島市出身、1988年12月11日死去、91歳、1925年(大正14)広島市議初当選以来、県議、市議を務め、市会議長にも4期就任、都市計画審議会委員、土地区画整理審議会会長(東部)等々歴任。

(参考資料)

1988年12月12日付、13日付中国新聞、広島市公文書館収蔵「任都栗司資料」

(編集委員 石丸紀興)

□ほっとコーナー

『人生フルーツ』

読者 柴田直美

横川シネマはいつもちょっと変わった映画を上映しています。コマーシャルズムにのらないドキュメンタリー作品が多いように感じます。そんな横川シネマで、ここ数年で最大のヒット作、ロングランが「人生フルーツ」ではないでしょうか。

映画の舞台は^{※1}高蔵寺ニュータウンの^{※2}津端さんち、^{※3}アントニン・レーモンド風の木造平屋と家庭菜園。映画は津端さん夫妻の日常をひたすら追っていきます。

「起きて、食べて、耕して、収穫して・・・」の繰り返しなのですが、なんだか楽しそうで元気な老夫婦。「こんな年寄りになりたいなあ」とつい思ってしまいます。

野菜と果物は自給自足。パソコンや携帯電話はなくて、その代わりに津端さんは毎日お手紙を書きます。身近な自然の有り難さ、自らの手で作る生活の愛おしさがスクリーンからあふれてくるようで、「幸せな気持ち」を共有できる素敵な映画でした。



さて、私はこの映画を見終わったあと、とある別の映画のことを思い出していました。それは、以前やはり横川シネマで見た「^{※4}ニュータウン物語」です。こちらは岡山県の山陽団地が舞台。団地で成長した若者が、高齢化、空洞化が進む景色を追いかけ、「僕の育った団地の未来はどうなっていくのだろうか?」と問いかけるようなドキュメンタリーでした。

私は「人生フルーツ」は「ニュータウン物語」のアンサー映画のような感じました。ただ、津端夫妻のように「団地の2区画を購入し、片方にシンプルだけどセンスのよい家を建て、もう片方は野菜園・フルーツ園にし、空間も暮らしも時間をかけて醸成していく・・・」というのはあくまで特殊解です。現実の郊外団地では、空き家となったあと土地ごと売りに出され、1区画が半分にされて、1号地、2号地と狭くなって再販されてしまうことが多いです。ちょっと悲しいですね。

土地利用は長い目で見なくてはいけないし、便利に慣れた生活を大きく変えることも難しいです。でも、津端さんのような暮らしに憧れる気持ちも少なからずあり、この夏、我が家にもブルーベリー鉢植えが増えました。

鉢の世話を始めてから知ったのですが、ブルーベリーは紅葉するそうです。朝晩肌寒くなったせいでしょうか。我が家でも葉先にほんのり秋の兆しが見られます。



※1 高蔵寺ニュータウン：愛知県春日井市にあります。1960年代に造成が始まりました。

千里ニュータウン、多摩ニュータウンなどと並ぶ有名なニュータウンです。

※2 津端修一：映画の主人公。建築家。高蔵寺ニュータウンの計画にも携わりました。

※3 アントニン・レーモンド：チェコ出身の建築家。戦前・戦後の日本で活躍しました。

※4 ニュータウン物語：2003年、本田孝義監督。

○ 人物登場：堀口 力氏（樹木医）

広島市の被爆樹木を見守っている樹木医を訪ねる。本宅の向かいの菜園に囲まれた離れ（書齋）があり、そこで取材する。

☆ これまでの軌跡

宮崎育ち。鹿児島大学の4年生の夏休みに屋久島の山に登り、半年前に発見されたばかりの「縄文杉」に出会い、その大きな感動から木に関わる職業に就く決心をする。

卒業後1年間、福岡の植木屋で予備知識を習得し、翌年に縁あって広島市の造園会社に就職。当初、日本庭園をやりたいという思いがあったが、広島に住んで、広島に木を植えることは平和に資することに気付かされる。

28歳の頃、日本で初めて「樹医」を名乗った第一人者の山野忠彦氏に出会い、「広島市の被爆樹木を守りなさい」とアドバイスを受ける。

1991年に樹木医資格制度ができ、翌年に資格を取得。50歳（1995年）に独立し、樹木医として活動を始める。

被爆樹木の保全などの功績が評価され、2015年に広島市民賞を受賞。



略歴：1945年生まれ、宮崎県出身。1968年鹿児島経済大学卒業。1969年広島市の造園会社に就職。1995年独立し、樹木医として活躍

☆ 被爆樹木が注目され始める

昭和48年、広島逓信病院で被爆したアオギリ3本が平和記念公園に移植され、沼田鈴子さんが語り部として活動されたことから注目されるようになる。その10年後、基町小学校の6年生が大事に見守っていた被爆エノキが台風で折れた時、マスコミ各社が大きく取り上げ話題となる。市も関心を寄せ、「中区民だより」を使って市民に呼び掛け、身近な被爆樹木の情報を集め始める。

☆ 物言わぬ証人としての平和発信

被爆者が高齢化して被爆体験を語る人が少なくなるなか、物言わぬ証人として被爆建物や被爆樹木に期待が集まる。市は1996年から「被爆樹木」を登録し、2005年にその生命力で多くの人々を勇気づけてきた被爆樹木を後世に伝えるため「緑の伝言プロジェクト」をスタート。その一環で被爆樹めぐりが始まり、ガイド役を務めている。

2011年には国連訓練調査研究所（ユニタール）とANT-Hiroshimaが中心となって「グリーン・レガシー・ヒロシマ（GLH）」が創設され、被爆樹木を守り、その存在と意味を広く世界に伝えていくため、被爆樹木の種や苗を配布し植える活動を続けている。

昨年秋、ジュネーブ国連欧州本部において、潘基文国連事務総長による広島から寄贈された被爆樹2世のイチョウ苗木の記念植樹式が行われ、GLHを代表して出席した。

☆ 被爆樹木の保存の考え方

昨年度、市による本格的な樹勢調査を実施。4割程度が「不良」の結果が出たが、街路樹や公園の樹木などと樹勢においては大きな違いはない。被爆によるダメージの影響が出なかった理由として、強い個体の木が残っている、被爆樹は大切に守られている、などが考えられる。

保存の基本的な考え方は、樹木の持つ生命力とあるがままの姿を尊重し、なるべく人為的な手を加えない必要最小限の手当てで見守り続けること。剪定は被爆樹では最小限にとどめる。

☆ これからの話

原爆を生き延びた樹木とその子孫の木を大事に残していくことは広島市の使命である。今自宅の庭の片隅で2世の苗を育てているが、手狭なため広島大学の圃場で育ててもらい、大学構内に平和ロードを設けて植えていく計画がある。

現在、市は比治山の「平和の丘構想」を検討中。ふもとにある山陽文徳殿は被爆建物で、被爆樹ソメイヨシノも生存しているが、荒れたままである。改装して被爆建物や被爆樹木を守っていく活動の拠点とすることが、平和の丘構想に合致しているのではないかと提案している。

市の職員の中にも樹木医がいろいろな部署に在席し、協力しながらやっているのだから、後継者も育てている。

* コメント *

被爆樹木の保存に真摯に取り組む姿勢に頭が下がる。天職に恵まれることは素晴らしい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

○ 広島市中央公園を考える① 明治百年記念事業としての中央公園計画案

前号まで『ひろしま市民ひろばの提案』をシリーズで行ってきたが、これからは過去に中央公園のあり方について提案されたことを整理し、分析していく。今回は、広島市の委託を受けて、日本公園緑地協会が昭和42年に明治百年記念事業としてまとめた計画案を紹介する。

<Ⅰ> 公園区域の変遷

- ◇ 昭和21年、戦災復興計画の特徴的思想“公園緑地拡大思想”に基づいて、中島公園（現在の平和公園・10,7ha）と中央公園（70,5ha）が都市計画決定された。（図-1）
- ◇ その後、広島市の独自計画で中島公園と中央公園は、一体の『平和記念公園』（81ha）として構想されていた。しかし、昭和27年、中島公園と原爆ドーム区域だけが、『平和記念公園』として計画決定され、中央公園は『平和記念公園』から除外された。（図-2）
- ◇ 終戦直後、広大な旧軍用地であったため、公園用地の大半には、戦災者向けの応急住宅が建設されていた。これを継続するため昭和31年、中央公園の一部（13,2ha）を削って「基町住宅団地」が計画決定され、中層アパートの建設が始まった。（図-3）現在に至る。

（図-1）戦災復興都市計画
昭和21年（1946年）



都心の大公園として中島公園と中央公園を計画決定

（図-2）平和記念都市建設計画
昭和27年（1952年）



中島公園と原爆ドーム区域を『平和記念公園』に計画決定

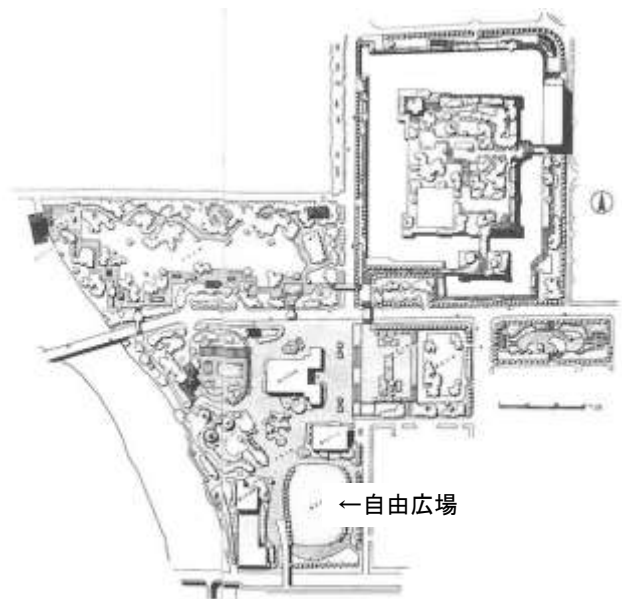
（図-3）計画の区域変更
昭和31年（1956年）



「基町住宅団地」を中央公園から区域除外

<Ⅱ> 明治百年記念事業としての広島中央公園計画

- ◇ 昭和41年、広島市は明治百年記念事業として中央公園を本格的に整備することとし、(社)日本公園緑地協会に整備計画の策定を委託した。東京大学横山光雄教授らが中心となり「広島中央公園計画」として翌年まとめられ公表された。（図-4）
- ◇ 広島市はこの計画を基にして一部変更を加えながら昭和55年に中央公園を整備完成させた。
- ◇ 「広島中央公園計画」の特色
 - ・ 幹線及び主要道路により公園が細分化されており、ゾーニングにより施設活用を図る。
 - ・ 各ゾーンは利用者の利便と安全を図るため、立体的な歩行系統（歩道橋）を確立する。
 - ・ 近接の平和公園との施設の分化、利用の一体化を図る。



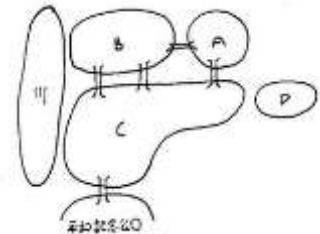
（図-4）広島中央公園の計画図
「広島中央公園計画」昭和42年（1967年）
（広島市公文書館所蔵）

- ・公園と一体となって河川水面の利用を図り、河岸にボートセンターを置く。
- ・野球場の移転跡地は市民の戸外活動空間として集合・運動等の出来る「自由広場」とする。

「自由広場」の説明： 既設の野球場（昭和32年完成の旧広島市民球場）は他に総合運動公園を計画し、その一施設として設けるべきものである。この空間は単に一つの広場ではなく、平和公園と中央公園との結びのため重要なものである。両公園が一体化するための繋ぎとして本広場から平和公園への連絡のための横断陸橋を架設する。

「広島中央公園計画」（昭和42年）より抜粋

- Aゾーン：城を中心とした静的な鑑賞的利用の区域
- Bゾーン：市民のピクニック、休養、集合情操の広場
- Cゾーン：活動的な戸内施設、文化・教化施設に対する人工広場的な戸外空間
- Dゾーン：分離された小区域で、周辺の土地利用形態と密着させた静的空間



広島中央公園ダイアグラム

<コメント>

- ・この計画では既設の市民球場（昭和32年完成）を早くも移転前提に、跡地を「自由広場」として計画しており、平和公園と中央公園の結び目を特別に重視した大胆な計画といえる。
- ・しかし、丹下健三氏の「広島平和都市建設構想」（昭和25年）は参考にされた様子はなく、南北の軸線や連続する河岸・遊歩道がなく、両公園の一体化の工夫に欠ける。

（編集委員 高東博視）

○「時代を語り建築を語る会（第18回）」報告

語り人：衣川知孝氏（カオル建設社長）

～広島地域における住宅リフォームの課題と取り組み～

豊富な住宅リフォーム経験を踏まえ、主に耐震改修と断熱改修についてノウハウを分かりやすく語る。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2017年9月27日（水）18:30～20:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆ リフォームの概要

・様々な分野のリフォームに取り組んでいるが、多い順に①台所・トイレ・風呂などの水回り改修（生活の利便性向上）②屋根・外装などの改修（劣化対策）③断熱や耐震性の向上（性能向上）④庭などの整備（趣味のため）。

・戸建て住宅では家族構成の変化や故障・劣化がきっかけとなり、リフォームのニーズが発生することが多い。

☆ 耐震補強

・昭和56年以前の本造住宅は現行の建築基準法の耐力を1とした場合、3分の1程度の耐力しかない。関東圏の人たちに比べると危機意識が薄く、耐震診断に対する市の補助制度を利用する人も少ない。他のリフォームのタイミングに合わせて耐震補強を加えることを推奨。

☆ 高断熱の家に住むことのメリット

・冬の寒さ、夏の暑さを和らげる高断熱の家は、脳梗塞や心筋梗塞を防ぎ、健康寿命を延ばす効果あり。良質な睡眠を可能にし、寒暖によるストレスを減らすためには、高断熱・高气密と換気によるCO₂削減、除湿などを効果的に行う必要あり。

・寒さの厳しい北海道ではその対策が進んでいるが、広島は遅れている。広島の気候に合った高断熱化に取り組んでいるところ。

☆ 快適性を向上させる

・断熱性を高めても気密性が悪ければ空調の効率が低下する。特に壁が煙突効果により気流



略歴：新木造住宅技術研究協議会（新住協）中四国九州支部事務局長 マスター会員、日経ホームビルダー『高断熱・高气密住宅』温暖地の結露カビ対策講師

が発生すると、部屋を暖房しながら壁が部屋を冷やしている。壁に気流止めを行うこと。

・掃き出し窓の上部にエアコンを設置するのが一般的だが、内側から窓側に向かって吹き出す方が効果的な場合が多い。ガラス面の結露防止にもなる。

・エアコンは埃が溜まるので、月1回程度は必ずフィルターの掃除を行うこと。効率が上がるので電気代が安くつき、寿命も延びる。

・エアコンに頼りがちだが、放射熱（輻射熱）の方が体に良い。床暖房の暖め過ぎは体に良くないので、部屋の設定温度プラス2度程度に抑える。

☆ 質疑応答ほか

・リフォームと建て替えの判断基準は？→リフォームの良さは改善点が明瞭なこと。住み慣れて愛着があること。構造的に耐久性がなければ、リフォームより建て替えを選択。

・木造2階建ての2階部屋が夏は異常に温度上昇。対策は？→日射により高温になっている小屋裏を機械換気。外壁面もすだれ等で日射を防ぐ。

・リフォームの事例や概算などの予備知識を得る方法は？→リフォーム支援ネットを利用。

・日本の場合、中古の木造住宅は資産価値が低いので、更地にして処分が一般的。リフォームして価値を高めてから売却できるシステムの方が望ましい。その売却資金で老後は立地の良い中古の安いマンションを購入し、リフォームして快適に住むことを推奨。

(編集委員 瀧口信二)

○ 「被爆建物見学会と広島都市形成の新視点討論会」(日本建築学会主催) 報告

◇ 日 時：平成29年9月2日(土) 15:15~21:00

◇ 見学会：平和記念公園レストハウス⇒広島平和記念資料館
・発掘資料展示⇒広島大学旧理学部1号館⇒旧広島陸軍被服支廠

◇ 討論会：合人社ウエンディひと・まちプラザ研修室A

◇ 主 催：(一社)日本建築学会 中国支部(都市計画委員会)

◇ 後 援：(公社)日本都市計画学会 中国四国支部



旧理学部1号館(正面玄関付近)

■ 見学会

最初に見学した平和記念公園レストハウス(旧大正屋呉服店、被爆時は燃料会館)では、ガイド役の石丸紀興氏(広島諸事・地域再生研究所)から興味深い説明があった(幾つかを紹介)。

・設計者増田清は構造的に強靱な建物を設計したこと(この他、広島市内には彼の設計した建物が3棟、すべて戦後も利用)

・平和記念公園コンペでの丹下建三グループ案には、原爆ドームに向かうメインの軸線の外、サブの軸線が慰霊碑から元安橋西詰めに向かい、旧大正屋呉服店の存在はなかった。その後の丹下による平和記念公園の計画では、サブの軸線が元安橋の東詰めに向かうことになったこと(旧大正屋呉服店を考慮したことが類推できる)。

・現在広島市は、外部の仕上げ・色彩の再現を含め、改修を検討している。

また、増田清の娘さんが作家阿川弘之の妻で、孫が阿川佐和子さんであること、アニメ「この世界の片隅に」にこの建物や一帯が描写されているとのことなどの説明もあった。

この後、広島平和記念資料館・発掘資料展示(広島平和記念資料館本館の耐震化工事に先立ち、旧材木町の遺構等を調査し記録)、広島市が保存・活用を検討している広島大学旧理学部1号館、今年度、広島県が耐震や補強方法などの調査を行う旧広島陸軍被服支廠を見学した。

■ 討論会～広島都市形成の新視点討論会～

見学会に引き続き、歴史的建物保存問題、歴史的空間継承問題、都市形成問題を議論するため、討論会(4人からの話題提供・問題提起と討論)を行った。

最初に広島平和記念公園被爆遺構の保存を促進する会の世話人・熊谷由利子氏より、発掘調査によって地下から風呂屋の跡(焚き口など)や被爆した多数の遺品が確認されたこと、盛土によって公園が整備されたことから地下には被爆遺構がほぼ手つかずで残されていること、こ

れらをいかに保存・公開していくかを考えていること、専門的な提案・アドバイスを望んでいることなどの話があった。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館館長の叶真幹氏からは、館のデータベースに被爆体験記が13.5万件ほどあること、被爆建物の意義は「被爆を追体験する手掛かり、実際に起こったことをリアルに感じられること、悲惨への想像力を呼び起こすこと」、被爆建物を保存・継承していくためには「市民一人ひとりが主体的に考えること、熱意と同時に具体的な発信力をもつべきこと」などの話があった。

広島大学の岡河貢氏からは、被爆建物を活用した平和教育の必要性、被爆建物は市民の遺産でもあり「世界遺産」でもあること、世界の若者の体験の場になって欲しいこと、旧広島陸軍被服支廠の改修案を広島大学の設計課題としていること、現在の耐震技術では以前の見積よりも安価で改修が可能なこと、街に平和のデザインを組み込むことなどの説明があった。さらに、広島大学旧理学部1号館のE字形の中庭部分を覆い、新たなシンボルを創り出すことの提案があった。

石丸紀興氏（前記）からは、被爆建物の保存・継承で克服すべき課題として、多額な改修費、改修の技術、それらを取り巻くシステム（法制度）、平和記念都市建設法に定めること（応えているか）、長崎市との連携などが指摘された。

また、集合体・群としての世界遺産を目指すこと、被爆100周年を考えること、ユニタールの活動や平和研究の蓄積を活かした「知の拠点」などの提案があった。

こうした話題提供・問題提起を踏まえ、討論・意見交換を行った。

（文責：日本建築学会中国支部 山下和也）

□ 編集後記

創刊5周年を経て、改めてこのメルマガのもつ役割と可能性を考えてみたい。

ここまで広島中央公園のあるべき姿を求めながら、ひろしまのまちづくりの歴史と動きを紹介してきた。その過程で分かったことは、あの被爆状況からいかに多くの諸先輩が努力し、今の復興に至ったかということだ。

そしていつの間にか、一応の復興の上にあぐらをかき、当時の熱いまちづくりの思いが薄れ、むしろ無関心と言うほどの状況となっている。市民は行政がやってくれると考え、行政は自ら考えるより他者の知恵や意見に頼っている状況である。まちづくりは不在なのか？

今こそ、この状況を打破し、まちづくりに向かう知恵と努力と結集が必要である。そのためには、こうした想いを同じくする仲間の意見の発表の場として、また討論の場として活用されることが、このメルマガの果たすべき役割となりうるのではないかと考える。

さて、まちづくりとは何であろうか？まちづくりが目指すものは何であろうか？

市民が不満や不平等を感じないで、普段に楽しく生活できる都市を実現することであり、まさに平和の構築に他ならない。「こうした矛盾に満ちた現在の状況を変える運動が伴わない限り、メルマガはスローガンに終わってしまう」との指摘が胸に響く。

（編集委員 前岡智之）

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第19回)」開催

- ・語り人：鎌田七男先生（広島大学名誉教授）
- ・テーマ：外部被爆と内部被曝（被爆）— 広島・福島ヒバク問題の本質に迫る
- ・開催日：2017年12月1日（金）18：30～20：30
- ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室B（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！
(投稿は500字程度以内でお願いします)**

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表